

我が心のすみか、大英図書館

経済学部教授 早川 勇

イギリスで有名なスーパーマーケットのセインズベリーには日本の食材が多く並んでいます。tofuも簡単に買えます。十年前に売られていた豆腐は食べられたものでなかったのが、最近のものは完全にパックされていても結構おいしいのです。tofuはほとんどのイギリス人が知っている日本語です。この語以上に知られている日本食材があります。soy sauceです。このソースが日本のものだと知るイギリス人は多いでしょう。しかし、soyが日本語語源の語彙であることを知る人は少ないと思います。それどころか、日本人でも知らない人が多くなっています。soyはもともと「醤油」のことです。この語は、オランダ語を通じて18世紀にイギリスに渡ったと思われます。ところが、この語がイギリス人によって使われるうちに意味が変化してしまいました。soy, soyaは醤油の原料である「大豆」の意味で使われることが多くなったのです。soy beanは「大豆」で、soya milkとは「豆乳」のことですし、soya burgerは「豆腐バーガー」のことです。

これらの語を含め約1,500の英語に入った日本語語彙の文献調査を行うために私はほとんど毎日一年間、大英図書館に通いました。図書館は十年前には皆さんご存じの大英博物館のなかにありましたが、今はそこから少し離れたキングズクロスというところにあります。ここにはユーロスター乗車のセント・パンクラス駅もあります。世界一といわれるこの図書館で、私はウイリアム・アダムズから現在に至るまでの日本に関する文献に現れる日本語語彙の調査を行いました。中心は日本の幕末から明治期における文献です。大英図書館はその作業をするのに最も適した場所です。

大英博物館が入場料なしで展示物を公開しているように、大英図書館も世界のすべての人々に無料で門戸を開放しています。十年前は学者や作家しか入ることができませんでしたが、今は学生や一般の人でも入場できます。常

設の貴重本(マグナカルタなど)の展示だけでなく、定期的にテーマを設け展示会も催しています。現在では、大英図書館は研究者の研究調査の場所というだけでなく、子供や老人を含めた教育の場であり、ロンドンの観光名所の一つでもあります。

ここではすべての文献を見ることが出来ます。明治初期に一人で東北地方などを旅行した女性バードの書籍も簡単に見られます。1727年に英語版がでたケンペルの『日本誌』はもちろん、アダムズの日記だって手にとって見ることが出来ます。私の専門領域にはいる日本初の英和辞典『英和对訳袖珍辞書』もあります。ここにしかない貴重な資料を自由に閲覧できます。ただし、監視はかなり厳しく、閲覧室には必要な物以外は持ち込めません。筆記道具は鉛筆以外認められていません。最近ではほとんどの閲覧者がパソコンを持ち込みます。パソコンを一日中使っても、そこでインターネットを利用しても、電気代や利用料金を請求されるわけではありません。

日本に関する膨大な英語資料が大英図書館にはありますが、それに匹敵する資料を保有する図書館が日本にもあります。それは京都にある国際日本文化研究センターの図書館です。多額のお金をかけ極めて精力的に資料を収集しています。見方によってはここは大英博物館より優るかもしれません。私も数年前に訪ね利用しました。それだけの資料が所蔵されているのであれば、ロンドンまで行く必要もないと考えられる方も多いでしょうが、決してそうではありません。日文研の資料は研究所員には利用が比較的自由なようですが、外部の者には利用がかなり制限されています。私の調査にはほとん



ど使い物にならないというのが実情です。宝の持ち腐れというのは言い過ぎでしょうか。資料が利用されれば、それだけ本は痛みます。しかし、それを恐れているのは図書館が公に開かれていますとはいえません。大英図書館はそれを恐れず、必要なものは日々補修しています。日文研の図書館は旧大英図書館の丸天井を模したようですが、その精神は学んでいません。



大英図書館には10近い閲覧室があります。それぞれが分野や調査内容によって分かれています。

私は「アジア・アフリカ閲覧室」を主に利用しました。特大の机と椅子が60席ほど用意されています。この室を利用する人の約3分の2がインド人やインド研究者です。彼らは、インドが植民地であった時代の生の資料を掘り起こしています。残念ながらこの室で日本人の姿はほとんどみかけません。日本を研究している人もほとんどいません。ただし、ロンドン大学で教鞭をとり中世日本の宗教を研究する女史の姿をみかけました。「アジア・アフリカ閲覧室」には常時8人前後のスタッフがいます。入口の出入りを監視する者、本や文献を整理する人、貸出返却を担当する者、利用状況を監視して回る人、そして専門的な質問に答えるレファレンス担当者です。これらの人々の仕事は厳密に分かれています。どんなに貸出返却のところで利用者が列を作ろうと、レファレンス担当者は絶対に手助けすることはありません。彼らは多くの場合、かなりの高学歴者で博士号を取得する者も多いと思われる。彼らは必ずネクタイをし、専門的な質問にきばきと答えています。その姿は自信に満ちあふれ、好感がもてます。

稀覯本はここでは見られません。日記や原稿を見る時には「貴重本閲覧室」に行かなければなりません。そこで私はケンペルやティチングらの著作を見ました。その室ではEighteenth Century Collections Online (ECCO) も利用できます。これによって大英図書館やオックスフォード大学ボードリアン図書館などが所蔵する18世紀文献をオンラインで見ることができます。すべてデジタル化されていますので、コ

ピーは容易にできます。また、すべての文献のすべての頁を語彙検索することも可能です。もちろん、完全にすべてを読み取ることができるわけではありませんが、とても便利です。これを利用して、私はジョンソン辞書関係の文献を100以上もコピーしました。また、大きな古地図を見るにはそれ専用の閲覧室に赴かなければなりません。最近では、音楽やフィルムの保存にも精力的で、それぞれ専門の室があります。調査の必要があり、「自然科学閲覧室」を訪れました。室内は「アジア・アフリカ閲覧室」とまったく違った作りで書籍も異なった配置となっています。利用者や利用の方法などを考慮し、分野ごとに配置を変えているのです。それぞれの閲覧室のレファレンス担当者の意見が強く反映されているにちがひありません。

大英図書館には私のお気に入りの場所があります。最上階の一番奥にある秘密の部屋です。ソファが3つ置かれています。私はお昼になるとそこへ行って、持参のスコーンなどを優雅に食べていました。「現代のマルクス」と私が呼ぶ老人がいつもここで本を読んでいます。ここは「フレンズ・ルーム」と呼ばれる交流とくつろぎの場所です。私は大英図書館の会員になりました。ここは会員だけが利用できる場所です。お世話になった図書館に多少とも寄与したいと考え、ながしのお金を寄付しました。

私は英語に入った日本語語彙の歴史辞書を編纂中です。私の仕事はほぼ完成に近づいています。A4の様式で千頁を超えてしまいました。この辞書を検索すれば、どんな日本語が英語に入り、どの時代にどんな風に使われたかがわかるようになっています。それは、辞書の形をとった日本文化や歴史の体系です。この辞書には古くから使われている bonze, moxa も登場しますし、私の世代を反映する Zengakuren, minamata も出てきます。日本経済を象徴する kaizen, kanban も収録します。そして、最近の anime, otaku, kawaii にも言及せざるをえません。大英図書館がなかったら、この辞書の編纂は容易なものではなかったと思います。その感謝の気持ちを違った形でも示したいと考えています。この図書館にはちょっと変わった貴重書保存の制度があります。ある特定の貴重な書籍を保存するのに、個人としてお金を提供するというものです。私はその制度に参加したいと考えています。